
仮面ライダーW・新たなる事件簿 第二章「Bの逃避行 / もう1つの『名コンビ』」

稲妻侯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW・新たなる事件簿 第二章「Bの逃避行/もう1つの『名コンビ』」

【Nコード】

N0152W

【作者名】

稲妻侯爵

【あらすじ】

「第1の事件」が、衝撃的な幕切れを迎えてから数日、「第2の事件」の始まりは、クインとともに訪れた……。

「新たなる事件簿」、第二章です。

先に、第一章をお読み下さい。

Bの逃避行/クイーンの依頼(前書き)

この物語はフィクションであり、実在する、いかなる人物、団体、事件とも、一切の関係はありません。

Bの逃避行/クイーンの依頼

これまでの、仮面ライダーWは・・・。

「エクストリーム!?」

「ただいま、翔太郎・・・。」

「「変身つ!!」」

《Cyclon-Joker!》

「モンスターペイシエント?」

「田上敦子さん、『天使のドーパント』の正体は、あなたですね?」

「あなたみたいなの、若くてエリート刑事さんに、私の気持ちが分かる訳がないわ!!」

《Angel!》

「絶望をゴールにするかどうかは、君次第だ・・・。」

「ねえ、目を開けてよ、敦子おー!!」

その日は、朝から暑かった。

昼下がりを迎えた鳴海探偵事務所も、気だるい空気に包まれていた。テレビの天気予報の音が、事務所の中の唯一の音であった。

本日も、カラツとした晴れでしょう。

ただ、夕方には、天気が少し崩れる見込みです。

急な夕立の可能性もありますので、外出される際は念のため傘をお持ちになった方がよいでしょう。

以上、『かしわき 榎脇由紀』がお伝えいたしました。

立ち上がった「左翔太郎」が、テレビのスイッチを切ると、事務所は完全に静かになる。

別に、事務所の中には、翔太郎1人しかいないのではなく、彼の相棒である「フィリップ」や、この事務所の所長の「鳴海亜樹子」もいた。

いつもは非常に明るい性格の亜樹子すらも黙りこくっているのは、数日前に起こった「ある事件」のことが、いまだに尾を引いているからだろう。

そんな静寂を破るように、事務所の扉が勢い良く開く。

そこに立っていたのは、いつも翔太郎たちに協力している「風都イレギュラーズ」の1人、「クイーン」だった。

「どうしたクイーン、今日は1人か？」

翔太郎は、暗い雰囲気を払拭しようとするように、クイーンといつも一緒に行動している、「エリザベス」がいないことをわざと明るい感じで尋ねる。

しかし、クイーンは、顔を覆うと、いきなり涙を流し始める。

これには、フィリップと亜樹子を含めた3人も面食らう。

クイーンは、顔を上げると、

「ごめんね翔ちゃん、驚かせちゃって……」

今日は、依頼しに来たの。

実は……」

「クイーンの依頼」を聞いた3人。

「な、何だと、エリザベスが行方不明!？」

翔太郎が大声で驚く。

「翔太郎、動揺するのは分かるが、もう少し落ち着きたまえ。」
たしなめるフィリップ。

「これを聞いて、落ち着いていられるか!？」

叫ぶ翔太郎。
すると、

パコーン!

亜樹子が、金文字で、「冷静クールにならんかい!」と書かれたスリッパで翔太郎の後頭部を叩く。

「翔太郎くん、クイーンはあたしたちを信頼して、依頼してくれたんだよ。」

それなのに、調査する翔太郎くんが落ち着きを失ってて、ちゃんと調べられるはずないでしょ!？」

「・・・そう、だな。」

悪かったな、みんな。」

そう言うと、一度深呼吸をしてから、帽子をかぶり、外に向かう。
亜樹子とクイーンも、その後をついて行く。

街に出て、聞き込みをするも、なかなか情報が得られない。

「・・・参ったな、ここまで情報がつかめないなんて。」

翔太郎が呟くと、

「・・・もしかすると、『あの子』なら、何か知ってるかも。」

翔ちゃん、亜樹ちゃん、話を聞きたい子がいるんだけど……。」
クイーンが誰かのことを思い出したらしい。

2人は、クイーンの案内のもと、その人物のところへ行くことにした。

その頃、

「君、かわいいね。」

俺たちとお茶しない？」

いかにもチャラそうな若者たちに声をかけられているのは、そう、今探されている当人、エリザベスであった。

「やめて。」

離してよ……。」

掴まれた腕を振りほどこうとするエリザベス。

だが、次の瞬間、彼女の様子が変わった。

「いや……。」

やめて……！

来ないで……！

怪訝そうな顔をする若者たちの後ろで、音声が響く。

《Bookshelf!》

「う……、うわああー……！」

クイーンに連れられて、2人がやって来たのは、一軒のカフェであった。

クイーンは、テラスに並ぶテーブルのうち1つに近づくと、その席に座る、紺のセーラー服の上から、ピンクのパーカーを着た、女子高生ぐらいの年齢に見える少女に声をかける。

それより、聞きましたか？

『2色の仮面ライダー』が帰って来たこと。

ここ1年の間は、似てるけど黒一色のライダーばかりで、2色の方はどこに行ったのか、気になってたんですけど……。やっぱり、2色は違いますよね！

ああ、仮面ライダー、やびやあ……!!」

恍惚とした表情で語る麻友の目は、まさしく「恋する乙女」のように輝いていた。

「……また始まった。」

この子、『仮面ライダー燃え』って言うのかな、ライダーの話になるといつもこうなっちゃって……。」

苦笑気味に言うクイーンに、

「お、おお……。」

と答えながら、

仮面ライダーのことを考えるだけでこれだけテンションが上がるんだったら、目の前にいる俺がフィリップと一緒にライダーに変身してるって知ったとしたら、ましてや、目の前で変身なんかしたら、この子は一体どうなるんだろうな……？

と、密かに考える翔太郎であった……。

と、そんな時、にわかに人々が叫びながら逃げ惑う気配がしてきた。走り出す翔太郎と、それを追いかける亜樹子。

「あつ……。」

じゃ、また今度ね！」

クイーンも、麻友に別れを告げ、急いで後を追う。

3人が、叫びが聞こえてきた辺りに着くと、そこには、本棚からそのまま手足が生えたような怪人が、人々の頭に手を伸ばしていた。

それを見た翔太郎は、

「くそつ、仕方ないか・・・。」

クイーン、今まで黙ってて悪かったけど・・・。」
と言いながら、ダブルドライバーを装着する。

そして、

《Joker!》

メモリを起動させると、それを左側に差し込む。

《Cyclon-Joker!》

そして、左右のスロットを開くと、彼の身体が風に包まれ、2色の戦士に姿を変える。

「うそ・・・。」

翔ちゃんが、仮面ライダー・・・!?!」

驚くクイーンをよそに、

「『さあ、お前の罪を数えろ!』」

「本棚」に向かって行くWCJ。

すると、「本棚」は、

『感じる・・・。』

お前が『地球の本棚』か？

・・・欲しい。

その知識、私によこせえー!!」

と言いながら、自分の棚の中から一冊の本を取り出すと、WCJに投げつける。

ドーン！

その、分厚いハードカバーの本は、Wの目の前で爆発する。

『本型爆弾か……。』

「接近戦じゃ、リスクが高いな。」

《Trigger!》

Wの左手が、メモリを黒から青に変える。

《Cyclon-Trigger!》

WCTが、「トリガーマグナム」で空気弾を撃ち出す。

着実にダメージを受ける本棚。

WCTは、サイクロンメモリをTマグナムにセットする。

《Cyclon Maximum Drive》

「『トリガーエアロバスター!』」

引き金を引くと、小型の竜巻のような弾丸が複数発射される。

それが、本棚に今にも当たりそうになった時、突然現れた「誰か」が、帯びていた剣で、空気の弾丸を一発残らず斬り捨てた。

「お、お前は……。』」

それは、あの時、「田上敦子」に矢を放った、「銀色の怪人」だった。

「銀色の怪人」は、Wには目もくれず、本棚の方を振り返ると、

『お前、さっさと逃げろ。』

と言った。

『あ、ああ……。』

誰だか知らないが、ありがとう……。』
と言いながら、逃げて行く本棚。

「おいお前、なんであいつを逃がした？
そもそも、なんで田上敦子さんを撃つたんだ!？」

翔太郎の言葉に、

「お前たちには、関わりのないことだ。

田上敦子は、言わなくても良いことを言おうとした、だから撃つた、それだけだ。」

あくまでも淡々と答える銀色の怪人。

Wは、空気の弾丸を撃ち続けるが、大抵斬り捨てられたり、当たってもそれほどダメージを与えられなかったりした。

「威力が軽すぎるか……。」

「危険な賭けだが、火力を上げよう。」

《Heat!》

右手が、メモリを緑から赤に変える。

《Heat - Trigger!》

すると、撃ち出す弾が、高熱を持つ。

銀色の怪人も、徐々にさばききれなくなったのか、圧されていく。

すると、銀色の怪人は、一瞬の隙を突き、下半身を馬のような四本脚に変え、走り去って行った。

おそらく、最初から本棚が逃げるまでの軽い時間稼ぎのつもりだったのだろう。

変身を解き、帽子を直す翔太郎。

戦いを呆気にとられたまま眺めていたクイーンが、

「まさか、翔ちゃんが噂の仮面ライダーだったなんて、意外だったな……。」

と言つと、

「正確には、俺とフィリップの2人で変身してるんだけどな。

あつ、俺たちがライダーだっていうことは、さっきの麻友ちゃんには言わないでおいた方がいいと思うぜ。

あの子、それを知ったら、テンションが上がり過ぎて、とんでもないことになりそうだからな・・・。」翔太郎が答えた最後の言葉に、クイーンや亜樹子は苦笑気味に頷くのだった・・・。

その頃、フィリップは、先ほどの戦闘で得た情報を元に、「本棚」のものを検索していた。

やがて、彼の前に、一冊の本が残る。

それを開いたフィリップは、

「バ、バカな・・・。」

こんなことが・・・!?!?」

ブルルルル。

翔太郎のスタックフォンに着信が入る。

「もしもし。」

どうした、フィリップ?」

「翔太郎、さっきの本棚のドーナツのことが分かった。

メモリの種類は『ブックシエルフ』、『本棚の記憶』を内包している。

このメモリを使用すると、他人から知識を奪い、自分のものにすることができる。

ちよつと、買ったばかりの本棚を、本で埋めていくようにね・・・。さらに、その特性からか、使用者の知識欲を掻き立てるらしい。

おそらく、Wを見て『知識をよこせ』と言ったのも、僕の『地球の本棚』にアクセスする能力を感じ取ったからだろう。」

「なるほどな……。」

で、使用者については、何か分かったのか？」

翔太郎の問いかけに、

「……。」

「……フィリップ？」

「いいかい翔太郎、くれぐれも、落ち着いて聞いてくれたまえ。

メモリの使用者、それは……。」

そして、「ある名前」を口にするフィリップ。

その瞬間、翔太郎の表情が軽くひきつる。

「……悪いフィリップ、よく聞き取れなかった。

もう一度、ゆつくり言ってくれ。」「翔太郎！

頼むから、現実を受け入れてくれたまえ……。」

そして、もう一度「その名前」を口にする。

「……そうか。」

ありがとな、フィリップ。」

翔太郎は、電話を切ると、そばの壁に拳を叩き付ける。

「……翔太郎くん？」

フィリップくんは、なんて言ってたの？」

恐る恐る尋ねる亜樹子。

翔太郎は、亜樹子、そして、クイーンの方を向いて言う。

「さっきの『本棚のドーパント』が使っていたメモリは『ブククシ

エルフ』。

そして、その使用者は……。」

一旦言葉を切る翔太郎。

そして、深呼吸をすると、「その名前」を口にした。

「……『笠居智美』。」

息を呑む2人。

「つまり、『エリザベス』だ……。」

「あはははははは……。

『知識』が増えるって、こんなに楽しかったんだ……。

もっと、もっと、もっと、知りたい!!」

街のどこか。

そう言いながら高笑いするエリザベスの目は、完全に常軌を逸していた。

《Bookshelf!》

彼女は、自らの左手の甲に黒いカバーで、赤みがかった色の端子が付いたメモリを突き立て、その姿を、「ブックシェルフドーパント」へと変えると、また、知識を増やすために、どこかへと向かっていくのだった……。

Bの逃避行/クイーンの依頼(後書き)

エリザベスが「ぶつ壊れた」ことのシヨックのあまり、手に持ったティーカップを落つことした、白い詰め襟を着ている皆さん、こんにちは。

(そんな奴実在するか。
稲妻侯爵でございます。)

皆さんお気づきのことと思いますが、サブタイを予告から少し変更いたしました。

まあ、用心するに越したことはない、ということでご理解下さいませ。

さて、今回、駆け出し情報屋の渡部麻友が登場しました。

本文中にも出た通り、「仮面ライダー『燃え』」(not『萌え』)な彼女ですが、これは、モデルとなった渡辺さんが特撮好きなのにちなんでみました。

一応、彼女が仮面ライダーの正体を知るとは、少なくとも、しばらくはありません。

実は、彼女の仮面ライダー好きが、やがて「とんでもない事態」を巻き起こすことになるのですが、それは、まだ先の話です……。

さて、今回の事件を引き起こす、「Bのドーパント」の正体は、エリザベスでした。

これは、夏の劇場版で、風都イレギュラーズの中で唯一、エリザベスだけが、メモリを挿す(あるいは挿しかける)場面がなかったの、ここでメモリを使用してもらった、という訳です。

あの中では、アクセル、キー、バードの、「あの3本」を差し出す場面はありましたけどね。

あの時私は、画面に向かって、

「何でキーとバードを逆にして、アルファベット順に並べないんだ・
・。」と突っ込んでいたんですが、今、こんなものを書いている
とは・・・。

当時の私には、おそらく想像もつかなかったでしょうね・・・。

それでも、ある意味、あれがこの作品の原点なのかもしれませんが。
そして、私は、話をアルファベット順に並べている訳ですが、やつ
ぱり順番でないと気持ち悪いので・・・（苦笑）。

ちなみに、エリザベスが逃げていたのは、一度メモリを使ってみた
彼女が、メモリの力に恐れを抱き、一度はメモリを捨てたにも関わ
らず、メモリはひとりでにエリザベスを変身させようと彼女を追い
かけてきたため、彼女は、メモリから逃げ回っていた、という訳で
す。

結局メモリに追い付かれ、メモリに「吞まれて」しまったエリザベ
スですが、果たして、翔太郎、フィリップ、亜樹子、そしてクイー
ンは、かけがえのない「仲間」を救うことができるのでしょうか！？

お楽しみに。

Bの逃避行／エリザベスの苦悩（前書き）

この物語はフィクションであり、実在する、いかなる人物、団体、事件とも、一切の関係はありません。

Bの逃避行／エリザベスの苦悩

W、今回の依頼は……。

「ごめんね翔ちゃん。

依頼があるんだ……。」「

「何だと、エリザベスが行方不明!?!」

「ああ、仮面ライダー、やびゃあ……。!?!」

『その知識、私によこせえー!?!』

「メモリの種類は、『ブックシエルフ』、そして、その使用者は……、」

……。『笠居智美』。

つまり、エリザベスだ……。」「

「あはははははは……。『知識』が増えるって、こんなに楽しかったんだ……。

もっと、もっと、もっと、知りたい!?!」

《《Bookshelf!》》

翔太郎、亜樹子、クイーンの3人の間には、沈黙が流れていた。そして、翔太郎がそれを破る。

「なあクイーン、エリザベスが思い浮かべそうな、フィリップ以外の『頭のいい奴』っているか？」

「えっ？」

不思議そうな顔をするクイーンに、

「フィリップによれば、エリザベスは知識欲を満たすために、誰かを襲う可能性があるらしい。

フィリップなら戦えるからいいけど、それ以外の人物を選ぶ可能性もあるらしいんだ。」

翔太郎が補足的に説明する。

するとクイーンは、

「そうだな・・・。」

あっ、もしかしたら『きたりえ』かも・・・。

私たちがCDデビューした時からお世話になってる事務所で一緒に仲がいいタレントの中に、機転が利いて、いろんなことを知ってる子がいるんだ・・・。

ちよつと待ってて、事務所に電話して、今どうしてるか確かめてみるから。」

と言って、携帯を取り出すクイーン。

「はい、『Kプロダクション』でございます。」

電話に男性が出る。

「いつもお世話になってます。」

クイーンと申しますが、『小山さん』はいらっしゃいますか？」

「申し訳ございませんが、小山はただいま外出しております。

伝言なら、承りますが・・・？」

「いえ、急ぎの用事なので・・・。」

そちらに所属している、『北浜里英』きたはまちゃんは、今何をしているか分かりますか？」

「ちよつと、そういつたスケジュールに関することは、お答えしかねます・・・。」

・・・な、何だあんた!?

う、うわあー!!！」

プーッ、プーッ、プーッ、プーッ・・・。

「・・・やばいよ!!！」

急いで走り出すクイーン。

翔太郎と亜樹子は、あわてて彼女を追いかけていく。

3人が、事務所のビルにたどり着き、中に入ると、オフィスの一角で、デスクの列が激しく乱れており、そこには1人の男性が倒れていた。

おそらく、先ほど電話に出た人物だろう。

「おい、あんた、大丈夫か？」

翔太郎が男性を抱き起こす。

「う、ううん・・・。」

あつ、あのつ、うちの、うちの北浜さんが大変なんです!!！」

意識を取り戻した男性は、翔太郎にもものすごい勢いで話しかける。

「落ち着いて。」

一体、何が・・・?」「実は、私がクイーンさんと電話をしていた

時に、いきなり、本棚のような化け物が入ってきて、北浜さんの居場所を尋ねてきたんです。

恐ろしさのあまり、私は、本当のことを言っしまいました。

すると、化け物は私を突き飛ばしてそのまま行ってしまいました・・。

私が、もつと毅然とした態度をとっていれば、北浜さんを危険にさらすことはなかったのに・・・！」

「自分を責めなくて大丈夫だ。

下手に抵抗すれば、かえってあんたが危険だったかもしれないからな・・・。」

そこに、サイレンの音が聞こえてくる。

「もうすぐ、俺の知り合いの刑事が来る。

ちよつと無愛想だが、いい奴なのは保証するぜ。」

「左、ここは俺に任せて、早くエリザベスのところに行つてやれ。」

翔太郎は、ここに向かう間に、この「照井竜」に連絡して、事情を説明していたのだ。

3人は、男性から、北浜里英が口ケをしている現場を聞くと、ビルを出る。

そして、翔太郎がスタックフォンでフィリップに連絡をする。

すると、フィリップは、

「分かった。

僕もリボルギャリーでそちらに向かうから、少し待っていてくれたまえ。」

「フィリップ、お前も来るのか？」

「ああ。

エリザベスがメモリに手を出したのは、僕のせいでもあるからね・・。

「通話はそこで切れる。」

翔太郎は、亜樹子とクイーンの方を向くと、

「フィリップがこちらに向かってくれらしい。」

『エリザベスがメモリに手を出したのは、自分のせいだ』、そう言
つてな……。

一体、どういふことなんだろうな……？」

と言っ。

すると、クイーンは、何かを思い出したらしい。

「そう言えば……。」

実はね、前にエリザベスが言ってたことがあって……、」

『やっぱり、フィリップくんって賢いなあ……。

私なんかとは、話が合わないよね……。』

「エリザベス、そんなことのために、メモリに手を出したのかよ……

……!？」

思わず呟く翔太郎に、

「翔太郎くん、そういう言い方はよくないよ!」

亜樹子が戒める。

さらにクイーンも、

「そうだよ。」

女の子っていうのは、好きな男子のためなら、少し背伸びしたくな
っちゃうものなんだよね……。」

どこか寂しげに言う。

すると、そこに、Wのマスクに似た乗り物が走って来る。

「みんな、早く乗るんだ!」

3人のそばで停車したりボルギャリーの中から、フィリップの音が
響く。

その頃、北浜里英は、ロケの合間の休憩をとっていた。日陰でペットボトルに入った水を飲んでいると、人影が近付いて来る。

「きたりえ〜。」

「ああ、エリザベス。」

どうしたの、今日はクイーンと一緒にじゃないんだ？」

「うん、ちよつときたりえに用事があつてさ・・・。」

『知識』、ちようだい。」

「え？」

すると、エリザベスの笑顔が、邪悪に歪む。

《Bookshelf!》

エリザベスが左手の甲にメモリを突き刺すと、その姿は「ブックシエルフドーパント」に変わる。

変身の様子を見て、ペットボトルを落とす里英。

逃げようとするが、身体が動かない。

しかし、その時、丸い乗り物が現れ、ブックシエルフDをはね飛ばす。

「きたりえ、逃げて！」

その乗り物の天井が開くと、中から、知り合いのクイーンが現れたため、呆気にとられる里英。

「・・・いつたい、何がどうなつてるの!?!」

「また説明するから、とりあえず逃げて!!」クイーンに促され、その場から逃げ出す里英。

「エリザベス、もうやめろ……。」「

「翔ちゃんには、関係ないでしょ？」

これは、私とフィリップくんの間のことなんだから……。」「
驚くほど冷徹な口調のブックシエルFD。

そこに、翔太郎の後ろから姿を現すフィリップ。

「エリザベス、もうやめてくれ。」

僕が、いつ君に頭が良くなることを望んだ!?」
すると、

「フィリップくん、待っててね。」

私、もうすぐフィリップくんにふさわしい女性になれるから……。

「
先ほどとは異なる、甘い口調になる。」

今一つ噛み合っていない応答は、彼女がメモリに吞まれたつがある」とを示していた。

「……仕方ねえ。」

行くぜ、フィリップ。待ってる、エリザベス。

俺が、いや、俺『たち』が戻してやる……。!」

《Luna!》

《Joker!》

2人は、黄色と黒のメモリを起動させる。

「「変身っ!」!」

《Luna - Joker!》

翔太郎が風に包まれ、ゆっくりと倒れるフィリップの身体は、亜樹子が受け止める。

「へえ……。」

仮面ライダーって、翔ちゃんとフィリップくんだったんだ。」
冷静な調子を崩さずに言うブックシエルFD。

WLJは、腕を伸ばしてブックシエルFにパンチを放つ。

何発か食らってしまった、後ずさるブックシエルF。

しかし、すかさず、自分の本棚の中から、表紙に金文字で、「Bo
xing」と書かれた本を引っ張り出し、パラパラと素早くペー
ジをめくり始める。

「ボクシングについて、『閲覧完了』。」

そう呟き、本を閉じると元のところに納めるブックシエルF。

次の瞬間、ブックシエルFは、WLJの放つパンチを、軽快なフッ
トワークでかわし、当たりそうになっても、両腕でガードをする。

「まるで、プロのボクサーだな……。」

『得た知識を利用して戦い、勝てば相手の知識をまた奪い、戦えば
戦うほど強くなる、非常に厄介なメモリだ。』

「パンチでダメなら、こつちだ。」

できる限り使いたくなかったけどな……。」

《Trigger!》

《Luna・Trigger!》

WLJは、「トリガーマグナム」で、弾道を曲げながら連射する。
しかし、ブックシエルFは、また一冊本を取り出す。

「『ブレイクダンス』について、閲覧完了。」

ブックシエルFは、ステップを踏み、ジャンプをし、時にしゃがみ、
ウィンドミルを織り交ぜながら、弾丸を次々とかわしていく。

ヒップホッパーのようなポーズを決めると、ブックシェルフはWに問いかける。

「ねえフィリップくん、どうして私と戦うの？」

私は、フィリップくんのために頑張ってるのに……。」「エリザベス、僕は、メモリに頼ってまで、君が、僕に話を合わせようとしてもらいたくないんだ！」

僕は、ありのままの君にこそ、君の魅力があると思っているんだよ
！！」

右の複眼を光らせながら言うフィリップに、

「うそ……。」

私はフィリップくんが、バカな私に呆れてると思ったのに、フィリップくんは、そんなところが私の『魅力』だと思ってくれてたなんて……。

私って、本当にバカだな……。

……うっ、ああああああ！！！」

突如、頭を押さえて苦しみ出すブックシェルフD。

「お、おい、どうした、エリザベス！？」

差し出されたWの左手を払いのける「ブックシェルフD」。

「翔ちゃん、フィリップくん、来ちゃ、だめ……。」

ふいりつぶ、貴様ヲオシテ、『地球ノ本棚』ノスベテハ、ワタシガモラウ!!」

『・・・エリザベスの意識が、完全に呑み込まれた。翔太郎、代わってくれたまえ。』

『ファング』で行く。』

「・・・ああ。」

バツクルを外し、変身を解く翔太郎。

フィリップが手を伸ばすと、白い、恐竜のような小型メカが現れ、彼の手の中に収まる。

それを變形させたフィリップは、現れたメモリ部分のスイッチを押す。

《F a n g !》

《J o k e r !》

そして、今度は翔太郎が先にメモリをセットする。

フィリップは、自分のバツクルに転送された「ジョーカーメモリ」を押し込むと、「ファングメモリ」を差し込み、スロットを開きながら、Fメモリの上部のパーツを内側に倒す。

《F a n g ・ J o k e r !》

すると、フィリップの身体が風に包まれ、白と黒の2色の戦士に変わり、翔太郎が倒れ、亜樹子に身体を支えられる。

「W・ファングジョーカー」は、Fメモリ上部の、恐竜の顔に付いた角のように見える部分を2回弾く。

《Shoulder - Fang》

すると、WFJの肩に牙のようなものが生えたかと思うと、それを外して、ブーメランのように投げる。

ブックシエルフは、何度かはブレイクダンスの要領でかわすが、だんだんとかわしきれなくなっていく。

ついに、ダメージを受けてしまった。

それを見たWFJは、「シヨルダーファング」を手元に戻すと、元のところに付け、改めてバツクルの「角」を1回弾く。

《Arm - Fang》

すると、牙が肩から腕に移る。

そのまま、接近してブックシエルフを切り裂くWFJ。

「グウウ……。」

痛みに、うなりをあげるブックシエルフ。

しかし、次の瞬間、WFJの腕をつかむ。

「ツカマエタ！」

コレデ、「地球ノ本棚」ハ、ワタシノモノダ……。」

そして、Wの頭に手を伸ばす。

「おい、やべえぞ、フィリップ……。」
焦る翔太郎。

だが、それに対して、

「……お望みならば、『地球の本棚』なんてあげるぞ。
全部、ね……。」

仮面の下で、ニヤリと笑うフィリップ。

そして、何を思ったか、ドライバーを外し、元の姿に戻ってしまっ

た。

そして、ブックシエルフの手が、フィリップの額に触れる。

「……フィリップ（くん）！？」「」

翔太郎、亜樹子、クイーンの声が重なる。

凄まじい勢いで、ブックシエルフの棚の中に収められた本の背表紙が、タイトルで埋まっていく。
しかし、

「グッ!？」

……ナントイウコトダ、多イ、情報量ガ多スギル!
コレガ、『地球ノ本棚』ナノカ……!？」

ブックシエルフの動きが止まってしまった。

翔太郎たちの方を振り返るフィリップ。

その目は、緑色に光っていた。

「いくら、『本棚の記憶』を内包しているといえども、地球の本棚に比べれば、情報処理能力なんて、たかが知れている。

こうやって、一度に莫大な情報を流し込めば、オーバーロードするのがオチ、という訳さ。」

そうして、翔太郎たちのもとまで歩いてくると、フィリップは、膝をついてしまった。

「……知識を奪われるというのも、結構体力を消耗するものだね・
」

フィリップの肩を抱き止めながら、

「まったく、無茶しやがって・・・。
フィリップ、お前は休んでろ。
今度は、俺が1人でやる番だぜ。」
「
と言いながら、ダブルドライバーに似ているが、スロットが1つし
かないバツクルを取り出す。」

「グウウ・・・。
コシヤクナ!!!」
ブックシエルフは、また一冊の本を取り出すと、ページを開く。
そのとき、

ポツリ、ポツリ、ザー・・・。

雨が降りだし、その滴が本のページに触れたとたん、

「ア、アアアアー!!!」

なんと、書かれていた文字が消えてしまった。
ブックシエルフは、次の本を取り出すが、雨粒が触れるたびに、中
身が消えていく。

「どうなってるんだ・・・?」

翔太郎が呟くと、

「あれだけ厄介なブックシエルフのメモリだが、ひとつだけ弱点が
あったんだ。」

それは、『水』だ。

集めた知識を記録する、本のページは、水気に触れると、何故だか
知識が放出され、元の持ち主のところに戻ってしまうらしい。」
フィリップの言葉を聞きながら、翔太郎たちは、昏間にテレビで流

れていた天気予報を思い出ししていた。

ただ、夕方には、天気が少し崩れる見込みです。

急な夕立の可能性もありますので、外出される際は念のため傘をお持ちになった方がよいでしょう。

「フィリップくん、まさか、夕立の可能性を利用したの!？」
驚いた様子で尋ねる亜樹子。

「一応、自分でも、今日の昼から夕方にかけての空模様を検索して、雨が降る可能性は高いと判断したから、実行したんだけど、実を言えば、降らない可能性も無くはなかった。

でも、たまには、不確実な可能性に賭けてみるのも悪くない、と思っ
つてね。」

そう言つて、笑みをもらすフィリップ。

「本当に、無茶するよな……。」

さて、とつととエリザベスを元に戻すとするか。」

《Joker!》

翔太郎は、ジョーカーメモリを、「ロストドライバー」に差し込む。

《Joker!》

翔太郎の身体は、黒一色の、「仮面ライダージョーカー」に変わる。
早速、Jメモリを腰のマキシマムスロットに差し込むジョーカー。

《Joker Maximum Drive》

「ライダー、パンチ……。」
と呟きながら、飛び上がるジョーカー。

ブックシエルフは、消えゆく知識にも関わらず、かるうじて「ある情報」を読み取り、その情報に基づいて、姿を変えていく。

そうして、ブックシエルフが変化した姿とは……、

「翔ちゃん、あなたに『私』が倒せるかしら？」

「ま、『満里奈』！？」

そう、翔太郎の幼なじみであり、亜樹子が風都を訪れて初めての事件の犯人、「Tレックスドーパント」に変身していた、「津村満里奈」の姿であったのだ。

一瞬躊躇しそうになるジョーカー。
しかし、

「違う、お前は満里奈じゃない。

お前は、エリザベスだ。

待ってるエリザベス、ちよつと痛いが、『俺たち』、いや、『俺』が引き戻してやる！

この手でな！！」

そして、ジョーカーは、満里奈の姿をしたブックシエルフにライダーパンチを放つ。

ブックシエルフは、その姿を一瞬だけ怪人のものに戻すと、メモリが排出され、エリザベスの姿に戻った。

クイーンは、エリザベスの元に駆け寄ると、

パチーン！！

その頬を平手で打つ。

「バカ！」

心配したんだからねっ！！」

と言うと同時に、エリザベスを抱きしめる。

それは、いつものクールなクイーンの姿からは想像できない、感情をあらわにした姿であった……。

「ごめん、クイーン……。

私、怖かったの。

いつ、メモリの力で暴走して、クイーンを襲ってしまってもおかしくない、ってことが。

クイーンだけじゃない、翔ちゃんや亜樹ちゃん、それに、フィリッ普くんにも迷惑をかけるんじゃないか、不安で……。」

謝るエリザベスの言葉に、

「それでも、私は、エリザベスに相談してほしかった。

だって、私たちも、『2人で1人の、最高のパートナー』なんじゃないの！？」

クイーンが言う。

ハッとするエリザベス。

「……そうだった。

私、クイーンに迷惑をかけたくない、ということばかり考えてた。なんで、もっと早く『頼る』ことに気付けなかったんだろう……？」

2人は、互いに強く抱きしめあう。

翔太郎たち3人は、しばらく何も言わずに、それを眺めていた。

そして、時間が少し経って、エリザベスが翔太郎たちの方を向いて、語り出そうとする。

「翔ちゃん、私がメモリを手に入れたのは……。」

そこに、またしても、矢が飛んできた。
しかし、

《Cyclon-Metal!》

風を纏わせた「メタルシャフト」で、矢を薙ぎ払うWCM。

「同じ手が、2度通用すると思ったら、大間違いだ!!!」
『姿を現したらどうかな?』

その言葉に従うかのように現れる「銀色の怪人」。

しかし、今回も、田上敦子の時と同様に、ブックシエルフのメモリを拾い上げると、そのまま悠然と立ち去ってしまった。

「……逃がしたか。」
変身を解きながら言う翔太郎。

「あのメモリ、集めてどうするつもりなんだ……?
マキシマムを受けてもブレイクされない、か……。
調べてみる価値はありそうだね。」
フィリップも言葉を続ける。

そして、
「エリザベス、どうやって、メモリを手に入れたの?」
亜樹子が尋ねる。

「実は、もらったの。」
「もらった?」

誰に!?

エリザベスの答えに、さらに問いかける翔太郎。

「それは……。」

・・・、『優子先輩』なの。」

その答えを聞いたとたんにクイーンの様子が変わり、エリザベスの肩を掴むと、激しい口調で言った。

「エリザベス、あんた、それ本当なの!？」

もし、いい加減なこと言ってるんだったら、承知しないからね!!」
果たして、「優子先輩」とは、何者なのだろうか・・・？

それとほぼ同じ頃、街の片隅で、若い男が、1人の少女 こちらは、
後ろ向きで、顔は見えない と向かいあっていた。

少女は、ポケットの中から、表面に「B」と書かれたメモリを取り
出すと、男に渡す。
受け取った男は、

《B i s h o p !》

メモリを一度鳴らすと、

「本当に『挿した』だろうか？」
と少女に尋ねる。

コクリ、と首を縦に振る少女。

「・・・まあいい。」

男は、そう呟き、手に持っていたアタッシェケースを開くと、クツ
シヨン材に空けられた、メモリの形のくぼみに、今のメモリを押し
込む。

その複数のくぼみの中には、既にメモリが収められているものもあり、
その中のひとつには、あの、「エンジェル」のメモリも収められていた・・・。

男は、ケースを閉じると、傍らに置いていた、もう1つのアタッシェケースを持ち上げ、少女に渡して、先ほどのケースだけを持って去って行ってしまった。

男の姿が見えなくなると、少女は、ケースを持って、後ろを振り向く。

そして、着ていた「ピンクのパーカー」のフードを顔から外し、ニヤリと口元をゆるませる。

そのまま、少女、「渡部麻友」も去っていくのであった……。

その日の夜。

風都市内のある焼肉店に、北浜里英の姿があった。

そして、もう1人、差し向かいで、里英とともにホルモンをついついいる人物、それは、風都記念病院の新人看護師、「佐橋莉乃」であった。

「で、話って何？」

莉乃が口火を切る。

「実はね……。」

里英は、昼間にエリザベスの変身したドーパントに襲われかけた時の説明を始める。

「それでね、その場に、『探偵』っていう人がいたんだけど、それが、『さっしー』が前に言ってた『探偵さん』と一緒にんじゃないかなあ、って……。」

莉乃の箸が止まる。

「それで、自分でお礼が言いたい、っていうのもあったから、前に話した、『クイーン』を通じて、その探偵さんの名刺をもらってきたの。」

と言いながら、翔太郎の名刺を出してみせる里英。

それを、まじまじと見つめる莉乃。

そして、意を決したように言う、

「……この名刺、貸してくれない？」

Bの逃避行／エリザベスの苦悩（後書き）

はい。

これにて、第二章、終了でございます。

今回は、ラストなどの部分を除けば、基本、レギュラーキャラだけで物語が進むようになっております。

これは、本編では、あまり掘り下げられなかった、クイーン&エリザベスのストーリーを、なおかつ、フィリップとエリザベスの関係性を中心に書いてみよう、というのが、前からあったからなんです。

フィリップと女性との絡みと言えば、本編では、主に「若菜姫」でしたからね。

でも、終盤で、実の姉弟であることが明かされて以来、若菜は、ミュージアムの一員として彼の前に立ちはだかり、そのまま最終決戦に突入してしまった感じで……。

結局、エリザベスは、フィリップに振り向いてもらえないまま、みたいな感じがしたので、

「ぶつちやけ、エリザベスの心中って、どんな感じだったのかな？」
そして、

「フィリップはいったいエリザベスをどう思っているのかな？」
という疑問（？）が生じた訳です。

これは、ある意味、この問いに対しての、私なりの1つの答え、みたいなものです。

すなわち、フィリップは、ちょっとぴり天然なエリザベスのことを、憎からず思っていた、って感じてしょうかね……。

（あくまで、独自解釈ですよ。）

余談ですが、私は、どちらかと言えば、あまり頭が良すぎるよりは、少し天然っぽい感じの方がタイプです。

（そのカミングアウトはいらないだろ。）

閑話休題。

まあ、これには、多分、翔太郎や亜樹子などの、「仲間」との日々があつて、フィリップが、もはや、検索にしか興味のないただの「変人」ではなくなったから、という部分が大きいと思います。

おそらく、その頃のフィリップなら、

「恋愛？

検索項目としては興味深いが、いかんせん、非合理的要素が大きすぎるね。」

とか言っちゃいそうな気がするんですよ……。

そう考えると、今回の事件がうまく解決したのは、時期的な要素もあつたのかもしれないね……。

あと、今回は、クイーンを、いつもより感情豊か（？）にしてみました。

普段はクールなクイーンですが、大切な「相棒」のためなら、熱く、真剣になれる、というのは、ちょっとカッコいいかなあ、という単純な理由なんですけどね……。

あとは、最後に、北浜さんと、佐橋さんの食事シーンで、ホルモンを食べさせたんですが、なんとなく、「りのりえ」ならホルモンかな、という勝手なイメージがありました……。

「どうせホルモンを食べさせるなら、『5人』揃えるよ！」

とおっしゃる方々はいらつしやるかと思いますが、以前申し上げた通り、わたくし作者は、基本AKBには、さほど詳しくなく、その上、私の構成員では、その2人を出すので精一杯だったのです。AKBファンの皆様、とりわけ、今回登場させられなかった、「チームホルモン」の3名を演じておられるメンバーのファンの皆様、本当にすみません。

実は、私は「マジすか学園」をきちつと見たことがないもので……。
言い訳のようだと思われるでしょうが、どうかお許しくださいませ。

あと、初めの方に出てきた、「好きな男の子のためなら……。」というクイーンのリフは、何かのテレビ番組の受け売りです。残念ながら、何の番組だったかは忘れてしまいましたけどね。まあ、受け売りが必要ないくらいに女心が分かるのなら、今ごろ「彼女いない歴〃年齢」ではなくっていらっしゃるでしょうけどね……。

ハッハッハッハッハ、ううううう……。（泣いている。）
今、ハゲタカヤミーが大量に作れそうな気分です……。

それはさておき、なんとか「第2の事件」も解決した訳ですが、翔太郎たちは、そのまま、「第3の事件」に巻き込まれて行きます。

その先に待つ「真実」とは何か、ぜひその目でご覧ください。

と言っても、投稿には、まだ時間がかかりそうなので、もうしばらくお待ちくださいませ。

では、次回予告と、設定集をお楽しみあれ!!

次回予告

次回、「仮面ライダーW・新たなる事件簿」は……。

クインとエリザベスの中学時代の先輩、「小山優子」。

翔太郎たちは、今回の事件の鍵を握ると思われる、彼女に会いに行くが……、

「あんたたち、うちのかわいい後輩に手出したら承知しないよ！」

《Kaleidoscope!》

その頃、事件の「黒幕」は、静かに動き始めていた……。

「この世界には、『裁き』を加えなきゃな……。
『王』の名の下に。」

《King!》

次回、「告白するK/最凶最悪の王、現る。」

「……そろそろ、いい加減にするんだな!!」

これで決まりだ!

B・設定

・エリザベス

ご存知、「風都イレギュラーズ」の1人で、クイーンの「相棒」である。

今回、突如として姿を消し、クイーンが翔太郎たちに依頼をするこ
ととなった。

本名は、「笠居^{かさい}智美」らしい。（これは、あくまで作者のオリジナル設定である。）

実は、同じ頃、街の人々から知識を奪う事件を起こしていた、「ブックシエルフード・パント」の正体であり、メモリの力に恐れをなし、自ら姿を消していたのであった。

最後には、メモリに吞まれ、翔太郎たちの前に立ちはだかることに
。。。

・ブックシエルフード・パント

「本棚の記憶」を内包する、「ブックシエルフメモリ」を、左の手の甲のコネクタから挿入した、エリザベスが変身した姿。

本棚から、そのまま手足が生えたような姿をしている。

人の額に手を当てることで、その人物の知識を奪うことができる。

その時、奪った知識は、身体の本棚の中に収められた本の中に記録され、表紙にタイトルが浮かび上がる。

さらに、奪った知識を利用し、ファイトスタイルが洗練されていくことで、ますます強くなり、さらには、知識の中にあるものに姿を変える能力も持つ、フィリップいわく、「厄介なメモリ」である。

しかし、知識が記録された本のページは水に弱く、濡れると知識が

放出されてしまう。

メモリの表面に書かれた文字は、「本がぎっしりと詰まった、2段の本棚」で、Bの字をかたどっている。

最後は、エンジェルメモリと同様に、排出されたところを、「銀色の怪人」に回収されてしまった。

・かしわき 榎脇由紀

「風都テレビ」で、昼間に放送されている、「お昼の風都ショー」で、天気予報のコナーを担当しているキャスター。

テレビに映る、天気予報シーンのみの登場だが、この天気予報が後から役に立つこととなった。

・きはま 北浜里英

クイーンやエリザベスが、CDデビューの時にマネージメントしてもらった芸能事務所、「Kプロダクション」に所属する女性タレント。

知識が豊富で、なおかつ機転が効くため、バラエティにもよく出演し、「きたりえ」の愛称で親しまれている。（基本的に、「ご本人」と変わらない、とお考え下さっても、差し支えない。）

今回の事件では、その知識の豊富さから、エリザベスに襲われかけリボルギャリーに乗った翔太郎たちに助けられた。

また、「風都記念病院」の看護師、「佐橋莉乃」とは友人であり、物語終盤で食事をしていた。

・わたなべ 渡部麻友

駆け出しの情報屋で、「風都イレギュラーズ」の（自称）候補生。まだニックネームはないが、クイーンからは、「まゆゆ」と呼ばれていた。

仮面ライダー「燃え」（not「萌え」）らしく、ライダーのことを語り出すと止まらない。

実は、「ビショップ」のメモリを所持していたが、謎の「若い男」にそれを渡し、代わりに何かの入ったアタッシェケースを受け取っていた。

果たして、その目的とは……？

（ちなみに、名字は渡部だが、「欲望の王」の「中の人」とは無関係である、念のため。）

・「B」の話

今回も、「B」にまつわるものを解説しよう。

まずは、「ブックシエルフ」（Bookshelf）。

エリザベスを使用したメモリであると同時に、フィリップの持つ、「地球の本棚」も示している。

それにしても、メモリに呑まれたエリザベスが、知識を求めて最後に襲ったのが、彼女が追い付きたいと願っていた、フィリップだったというのは、なんと皮肉なことであるだろうか……。

そして、ブックシエルFDが閲覧した知識が、「ボクシング」（Boxing）と「ブレイクダンス」（break dancing）。

さらに、渡部麻友が持っていたメモリは、「ビショップ」(Bishop)。

ここまでは、気づかれた方も多いただろうが、実は、Bが表すものは、もうひとつあるのだ。

それは、今回のドーパントに変身した、エリザベスである。

「何を言ってるんだ。

エリザベスの頭文字はEじゃないか。」と思われた方も多いに違いない。

しかし、エリザベスに限らず、英語の名前には、ニックネームというものが存在する。

ウィリアムなら「Bill」、マイケルなら「Mike」・・・、といったものである。

そして、エリザベスの場合、それは、「Betty」、あるいは、「Beth」なのである。

「・・・そんなもん、分かるかぁー!？」

と思われた皆さん、お怒りはごもっともである・・・。

苦しい引っ掛け方に、この場を借りてお詫びを申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0152w/>

仮面ライダーW・新たなる事件簿 第二章「Bの逃避行 / もう1つの『名コン

2011年10月6日04時08分発行